

「……どうしてもその胡散臭えバイトするってんなら、なるべく早くやめろ。すぐやめろ。やめたらなんか奢ってやる。だから急いでやめろ」

一応帝人の気持ちにくんでくれ、説得をあきらめたらしい（だがあきらめきれない）静雄の台詞に微笑を浮かべる。本当に良い人だなあ、と思う。こんなに良い人なのに、なぜ臨也はあんなにも嫌うのだろうか。

『本当に本気で大丈夫なのか？』

「はい、大丈夫ですよ。ただのごっこなんですから」

笑顔のまま頷く。そうだ。大丈夫だ。これはただのバイトでしかない。それも一ヶ月程度の、短期バイト。それだけだ。それももう十日を過ぎた。長くても、あとせいぜい二十日。

そんな帝人を見て穏やかに、どこか哀れむように新羅は告げた。静かな、どこか達観した声音で。

「自分の感情が五里霧中なあたり、帝人君と臨也はちよつと似てるかもしれないね」